

# 地域社会づくりとしてのミニ独立国

## — “ツチノコ共和国” と “河童共和国” を例に —

A Study of Mini-Nation Campaign (the regional promotion by quasi-nation style)  
for the Community Project

— A Case Study by “REPUBLIC TSUCHINOKO” and “REPUBLIC KAPPA” —

白石 太良\*

Taro Shiraishi

1980～90 年代に優れた地域振興策とされたミニ独立国は、2000 年ごろから話題性を無くして衰退していった。その中でツチノコ共和国と河童共和国は、ツチノコと河童という民俗事象を地域らしさのシンボルとし、郷土愛の再構築こそが地域振興の前提ととらえ 30 年間活動を続けてきた。ミニ独立国とは、経済的活性化策というより地域社会づくりに焦点を当てた一種の社会運動であることを 2 つの事例から知ることが出来る。

キーワード：ミニ独立国、地域振興、社会運動、地域愛、民俗伝承

### はじめに

ここでいうミニ独立国とは、地域の特色を強調してさまざまな活動を展開するために、地域の諸団体が発足（建国と呼ぶ）させた擬似的な国家のことである。ミニ独立国の発足のねらいは経済活性化や自然保護、あるいはコミュニティ再生などさまざまであるが、国名はもとより活動に遊び心とユーモアのあるしかけがほどこされるためパロディ王国と呼ぶこともある。

ミニ独立国の考え方が全国的に広がるのは 1970 年代末以降で、1980 年代から 90 年代前半にかけて 200 を超えるミニ独立国が誕生、本稿で事例とするツチノコ共和国や河童共和国もその 1 つであった。その大半は、高度経済成長期に経済発展から取り残された地域が活力を取り戻そうという活動のなかでミニ独立国と称したもので、地域活性化のための情報誌『地域づくり』17 号（1988 年刊行）では「いま流の地域活性化手法」として「につぽんミニ独立国事情」を特集、「自治体も独立国の効果を認める」とまとめている<sup>1)</sup>。しかし、バブル経済の崩壊や行政域の拡大なども関係して 2000 年ごろからはミニ独立国の大半が活動を中止、その後ほぼ 20 年を経た現在では、ミニ独立国という地域活動が存在したことさえ知る人びとも少なくなった。

---

\*流通科学大学名誉教授、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

この状況のもと奈良県南部にある下北山村のツチノコ共和国では、2018年5月にツチノコ探検30年回顧展を開催し、ミニ独立国という地域振興策のあり様について再考するシンポジウムが開かれた。このときパネラーとして参加した筆者は、「なぜ今もミニ独立国を称し続けるのか」「なぜツチノコが地域振興のシンボルなのか」という問題に直面したのである。下北山村では、人口減少と農林業が停滞するなかで地域の活性化を願う意識がいまも強く働いている。しかし、ミニ独立国の話題が地域振興の表舞台に姿を見せる機会の少なくなったいまもなぜその重要性をいうのか<sup>2)</sup>、また、ツチノコ目撃譚に何を求めようとしたのか。そこには、経済的活力向上の手段としての役割から脱皮したミニ独立国のあり様が見て取れた。

一方、熊本県八代市の河童共和国は、建国30年を記念して2017年7月に『30年史』を刊行<sup>3)</sup>、全国各地から100人余(台湾からも1編)の随想が寄せられた。これに寄稿した筆者は、「一時的・直接的な成果を求めるのではなく、地域像を見据えた諸活動こそが長きにわたって独立国であり続けた理由ではないか」としたが、何ゆえに河童共和国が多くの人びとから関心をもって受け止められたのかを見ていくなかで、ミニ独立国は経済活性化のためのみの手段ではないとみる立場をうかがうことができたのである。

ここにおいて本稿では、ツチノコや河童といった民俗伝承の役割にも注目しつつ、ツチノコ共和国と河童共和国の30年間を振り返りながらミニ独立国という活動の意味を問い直してみたい。

## I. ミニ独立国の盛衰

### 1. ミニ独立国の始まり

ミニ独立国という考え方は、1981年に発表された井上ひさしの小説『吉里吉里人』に端を発するとされる場合が多いが、実際には自然との調和を目指して1972年に発足した長崎県西海町(当時)の「自然の国」が始まりと考えられる<sup>4)</sup>。もっとも、この国は自給自足を目指す活動であったので、ユーモアのある活動で地域活性化を図ろうとしたミニ独立国としては1976年に建国された大分県宇佐市の「新邪馬台国」が最初であった。

これに触発されて、商工会など地域の経済諸団体がミニ独立国を立ち上げて第1次建国ブームを迎えたのは1980年代の初めである。そこには、遊び心のある活動のユニークさがマスコミ報道されてパブリシティ効果を生み、観光振興や物産販売など経済的な活性化につながるのと考え方があった。したがって、1980年代前半のミニ独立国は、白石(1988・1989)で若干の事例をあげたように、高度経済成長期からの経済効率優先主義のなか切り捨てられつつあった地域が、直接的かつ即効性をもって経済的活力を取り戻す話題づくりとして「独立国」を称したものと見てよい。そこでは、個々のミニ独立国の活動だけではなく、ミニ独立国オリンピックと称した交流スポーツ大会をはじめ後進国サミットと名付けた情報交換会の開催など<sup>5)</sup>、ニュース性のある全国的規模のイベントもまた活発に開催された。このようなミニ独立国の活動は地域振興を願うそ

の他の多くの地域にも関心をもって迎えられ、1980年代後半には後発のミニ独立国が数多く誕生して第2次建国ブームとなった。

もとよりミニ独立国建国のねらいは多様であり、白石（1990）でまとめたミニ独立国アンケート調査でも、経済的な発展のほかに、自然環境の保護、地域間交流、地域のコミュニティ運動など多様な目的が挙げられている。しかし、その多くは特産品の販売や観光客の誘致と回答しており、ミニ独立国の建国ブームは目新しい経済活性化策として各地で取り入れられたためと考えられる。その結果、西日本新聞は1989年の調査として北海道から沖縄まで全国に200を超える「国家」が存在すると報じた<sup>6)</sup>。

なお、1980年代後半からのミニ独立国について留意しておきたいのは、市町村が民間活力導入の手段としてミニ独立国に注目するようになったことである。市町村長を独立国の国王や大統領に据えるなど民間・行政の協働がさらに進んだほか、行政主導で建国されたミニ独立国もあり、パロディによる活性化策への期待がミニ独立国を公的に認知するようになったとみることもできる<sup>7)</sup>。行政主導のなかには、市町村ごとにミニ独立国を名乗ってそれぞれの地域振興策を競うとか、広域行政を目的にミニ独立国の連邦を組織するといった場合もあった<sup>8)</sup>。

## 2. ミニ独立国運動の衰退

ミニ独立国の活動が変化を見せるのは1990年代半ば以降である。しかし、ミニ独立国減少の兆しはすでに1990年ごろからうかがうことができ、先述の筆者によるミニ独立国アンケート調査では発送数203カ国に対し回答を得たのは93カ国であった。この傾向はさらに深まって1990年代後半には国数が半減<sup>9)</sup>、2000年ごろにはまだいくつかのミニ独立国が活動を継続したもののそれ以降はこれらさえ活動を休止し、面白さによる宣伝効果に期待したミニ独立国の大半が消滅したと筆者は白石（2010）で報告している。

これについて筆者は、1990年代初頭のミニ独立国に関する事例をまとめた白石（1991・1992）において、ミニ独立国が活発な活動を続けるためには次の4つの特徴が求められると指摘していた。

- ① 自然や歴史・文化から地域らしさを示すシンボルを見出し強調する。
- ② なぜミニ独立国という方式なのかの考え方が明確に示される。
- ③ 地域住民との連携と連帯のもとで活動が進められる。
- ④ 必ずしも即効性のある経済的效果のみを期待しない。

これは、ミニ独立国が郷土愛ともいべき地域へのこだわりのもとで地域のあり様をさぐる活動、すなわち社会運動の一形態であるとの指摘であり、パロディとユーモアによる経済的效果のみを期待するミニ独立国は早晩なくなるであろうとの予測であった。これが現実となり、イベント主催時などに国名を残すものはあったが<sup>10)</sup>、かつて「いま流の地域活性化手法」とまでいわれ

たミニ独立国の多くは21世紀を迎えるころに消えていった<sup>11)</sup>。

ミニ独立国活動の衰退は、それがもともとマスコミ報道によるバブリシティ効果に期待した活動であったがゆえに、パロディ化された行事等のマンネリ化も関わって話題性が薄れたことによるところが大きい。なかでも観光イベント型のミニ独立国の場合は、参加する観光客側にもバブル崩壊の影響とか生活スタイルやニーズの変化が関係するほか、主催する側もスタッフの高齢化や後継者の不足といった問題があった。市町村などが関与した場合も、大下ほか(1997)では「比較的堅実に続けているものが多い」とされたが、通称「ふるさと創生資金事業」とも関わってかえって行政の立場からの振興策のなかに埋没する場合が多く<sup>12)</sup>、平成の大合併に伴う行政域の枠組みの変化もあってミニ独立国の意味を見失うことも少なくなかったのである<sup>13)</sup>。

しかし、本稿で事例として取り上げるツチノコ共和国は、その名を冠してのイベントは2005年前後に終えたものの、地域らしさの象徴としてツチノコを見出し、地域を疑似的な国家にみたとてという考え方を放棄しなかった。また河童共和国では、地域文化としての河童伝承を知る社会教育的ねらいもあって経済的効果に力点をおくミニ独立国とは一線を画しつつ、地域のまとまりを国家になぞらえる活動を継続して現在に至っている。

## Ⅱ. ツチノコ共和国の変容

### 1. ツチノコ探検からミニ独立国へ

#### a. 下北山村の観光振興

奈良県下北山村のツチノコ伝承と「むらおこし」<sup>14)</sup>との関わりは白石(2019)において報告したので、ここではその概要にもふれながらミニ独立国の変容という視点から検討してみる。

下北山村は県の最南部、県庁所在地の奈良市から直線距離で約100km、周囲を紀伊山地の山々に囲まれ、三重・和歌山両県に隣接して位置する。面積は134km<sup>2</sup>と広いが人口はわずかに855人(2016年)に過ぎず、ツチノコによる「むらおこし」を始めた1988年ごろの約1,500人に比べると四半世紀の間に人口が半減した。



図 奈良県下北山村の位置

人口減少の背景は言うまでもなく産業構造の変化であり、下北山村では衰退の著しい林業に替えて地域を活性化させ雇用者を生み出せる産業として観光業の振興が指向された。しかし、観光資源としては熊野古道の1つ大峰奥駆道が通ることから修験者の来訪があるとはいえ<sup>15)</sup>、公共交通が恵まれないなかで一般観光客の誘致の選択肢は限られた<sup>16)</sup>。そこで、行政主導で推進された

のが潜在型のスポーツ公園と日帰り温泉施設の整備であり<sup>17)</sup>、村民有志が主体となって実施したのがツチノコをキーワードにしたイベントへの取り組みである。ツチノコ伝承を観光振興の起爆剤にと考えたのは、Uターン者で地域活性化を公約に村会議員を務めた野崎和生氏とそのグループであった。彼らが地域振興には欠かせない知名度の上昇のシンボルを求めているとき出会ったのが、『下北山村史』<sup>18)</sup> 民俗編に記載のツチノコ伝承である。

#### 資料 1 『下北山村史』民俗編 979～980 ページ（抜粋）

これも白蛇と同様にむしろ怪異に属するものかもしれないが、見たという人が何人もある。太さのわりにうんと短いのが特徴で、上からマクレて（転がり落ちて）来るという。横槌に似ているからだろうが、池原ではツチノコ、上桑原ではノヅチと呼んでいる。（中略）ノヅチがノー（カリバ）に居れば、そのめぐり一帯は草が生えぬ。（中略）ノヅチは山で千年、海で千年して天へ昇るが、人に見られたら出世できぬ。これがいるとヤマヌケして、川の水と一緒に海へ出る。（中略）方々にノヅチの話があり、小谷ではサイワッパ（弁当のお菜用のワッパ）ほどのまわりがあった（話者名略）。浦向の奥地でもほんの三・四年前、郵便局へ勤めている若い娘さんがワラビ採りに行って大きなナメクジのような、太短いぬめぬめした蛇を見たといって、真青になってW家へ飛び込んで来たことがある。（以下略）

これを如何に発信するかを探るなかツチノコ目撃の情報が寄せられ、まずは住民への周知を図るべく 1987 年秋の村民文化祭にツチノコ紹介コーナーを設置、合わせて目撃証言を聴く会を開催したのである。この活動は、ツチノコ探索の主催団体「下北山野生生物研究会」発足の契機となり、当時の未確認動物ブームもあってローカルではあるがテレビ放映や新聞報道でも伝えられ、ツチノコは蛇の変種として広く知られることになった<sup>19)</sup>。

#### 資料 2 ツチノコ目撃証言の例（要旨・話者名略）

- 例 1（A 氏） 1964 年 4 月。ワラビ採りの途中の道端に太く短い蛇がいた。見つめてくるので神秘的な感じがして、しゃがみこんで見ていると頭からカタツムリのような角が伸びてきた。ふと我に返ると 15 分ほどもしゃがんでいたようだ。
- 例 2（B 氏） 1977 年 7 月。踏んづけたときのグニュッとした感じは忘れられない。黄色い腹を見せながら一間ほど飛び、下ばえのなかに姿を消した。頭のうしろにヒレのようなものが付いていた気がする。
- 例 3（C 氏） 1986 年 7 月。運転中にビール瓶を大きくして平べったいものを発見、光沢のある鱗と三角の頭が印象的で、太った蛇のようなのに動きが直線的なことなど蛇の感じがしなかった。

そこで下北山野生生物研究会では、マスコミ報道のパブリシティ効果を好機ととらえてツチノコを起爆剤に観光客誘致を図ることとし、ツチノコ大探検隊と命名したイベントを 1988 年 4 月 16・17 日に開催した。このイベントは、未だ確認されていないツチノコの捕獲というロマンとともに地域の自然の魅力を発信するのがねらいで、その実施を全国紙やテレビ等が報じたことも

あって話題を呼び<sup>20)</sup>、全国各地から約 150 名の参加者を得て開催された。この成功を受けて同年 9 月 23・24 日に第 2 回の探検イベントを実施したが、この時は参加者数が半減している。

#### b. ミニ独立国の発足とその後

もとよりツチノコ探検において主催者は、イベント型の観光振興策が一過性ではないかという危惧を抱いていた。なぜなら、ツチノコ存在の確証がないだけでなくマスコミ報道依存の限界もあり、存在しないのであれば関心が薄れると思われたからである。そのため、怪獣ツチノコが棲息するかもという地域の魅力の発信に力を注ぐだけでなく<sup>21)</sup>、イベントの継続を願って関係人口（俗にいうファン）づくりを図ることになった。

そこで指向されたのが、ツチノコが棲息すると伝える地域らしさこそを地域資源ととらえ、下北山村の全体を擬似的な国家と見立てるミニ独立国であった。当時は前述のようにミニ独立国の

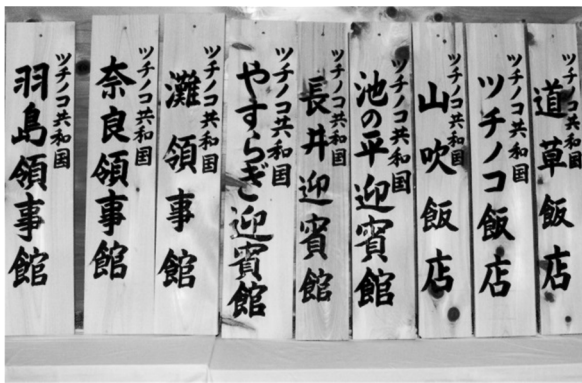


写真 遊び心のある表札（野崎和生氏提供）

盛んな活動が広く報じられており、下北山村においても国家を称して国民という名のファンを募って活性化を図ろうとしたのである。かくしてツチノコ探検の翌 1989 年 4 月にツチノコ共和国が誕生したが、パロディが売り物のミニ独立国として関係者をユニークな名称で呼ぶなど遊び心を随所に取り入れたことはいうまでもない<sup>22)</sup>。この年には、当時同じくツチノコ探検を行った

いくつかの町村に働きかけ、ツチノコ連邦（仮称）というミニ独立国の連携組織も模索している<sup>23)</sup>。この試みは実現しなかったが、長期展望からは地域間連携が必要と考えたことになる。

その後、ツチノコ共和国ではツチノコ探検を継続したものの、回を重ねても見つからないこともあって参加者は次第に減少、探索イベントは 1990 年を最後に開催されなくなった。しかし、ミニ独立国の名のもとで地域振興を図る考え方を变えることなく、1989 年に始まる蛍狩りなどいくつかのイベントが行われた<sup>24)</sup>。これらはいずれもツチノコの棲息を思わせる山林とそれに抱かれた暮らしの全体を楽しむ活動であり、ミニ独立国という表現で地域を面的広がりのある場所ととらえたイベントといえる。

なお、この間の 1992 年には、前述したミニ独立国サミットの主催団体となり、全国各地から 10 カ国を越えるミニ独立国が下北山村に集まって情報交換をしている。

ところが、ツチノコ共和国のイベントの多くは 2000 年代に入って順次終了、2005 年以降にはすべて休止状態になった。その要因について観光振興の視点からまとめた白石・野崎（2009）で

は、自然環境に頼るイベントにおける自然災害の影響<sup>25)</sup>、中核メンバーの固定化と高齢化に伴う後継者難、メンバーの個人負担に頼る経費問題、観光客の入込みを生活破壊とみる住民意識のほか、行政の振興策とのずれをあげている。このような観光イベントの中止は、ファンづくりというツチノコ共和国発足のねらいからいえば、ミニ独立国方式を続ける意味をなくすということでもあった。しかし、ツチノコ共和国はその後もなくなる（ミニ独立国としては「閉国」と表現される）ことなく継続され、下北山村の魅力発信の組織として機能し現在に至っている。

ではなぜツチノコの名を残し、ミニ独立国と称し続けたのか。これを考えるには、地域振興におけるツチノコの役割についてみておかねばならない。

## 2. ツチノコ伝承と地域振興

### a. 妖怪から未確認動物へ

ツチノコはその形状が木槌に似ているためか「槌の子」と書き、古代から知られていて古事記でもノツチと呼んで野の神カヤノヒメ（萱の姫）の別名とされた<sup>26)</sup>。ツチノコの民俗をまとめた伊藤（2008）によれば、江戸期には目撃譚が数多く残され、その範囲は北海道と南西諸島を除く日本各地に及ぶという。そこで語られるツチノコは、頭だけの太い蛇の形をした妖怪と考えられ、毒をもち人を襲い、人に祟るなど忌避される存在であった。呼び方はハチヘビ、ツチヘビなど地方によりさまざまで、ツチノコが一般化したのは1970年ごろからといわれる。

ツチノコが人びとの注目を浴びるのは、1960～70年代の高度経済成長期のころからであった。ツチノコに遭遇したという随筆家の捕獲活動の顛末が報道され<sup>27)</sup>、広く関心を呼んだのがツチノコブームの始まりとされる。もとよりそれは、妖怪としてのツチノコではなく探索の対象としてであり、日本にも居る未確認動物としてのツチノコであった。当時は経済発展に伴う心の高揚のもとで人びとが珍しさを求めた時代で、ネッシーや雪男など未知の動物への好奇心が広がっていたことが背景にあったと考えられる<sup>28)</sup>。しかもツチノコは他の未確認動物に比べて体形が小さく、各地に目撃譚を残すことが探索の興味を駆り立てたのかもしれない。

このことは、ツチノコが妖怪から未知のロマンのある動物へと変化したことを意味するが、その背景には人気漫画『ドラえもん』などにツチノコが取り上げられたことも関係している。すなわち、ツチノコのイメージの変化には子どもを含む大衆文化の影響もあったようで<sup>29)</sup>、姿形もかつての醜い太った蛇から怖さもあるが可愛い動物、いわばゆるキャラ風の親しみある小動物へとなっていたのである。

### b. ツチノコ探しによる地域活性化

下北山村のツチノコ探検は、このようなツチノコのイメージの変化のもとで行われた観光客誘致イベントであった。それは、未確認動物の発見者になる喜びを秘めたプログラムと考えられ、

ツチノコを地域振興に結び付けることになったのである。下北山村と同じく 1989 年にツチノコの探索イベントを実施した地域は管見の限りで 10 市町村に及ぶが、この年が已年でツチノコを蛇の化身とみる話題性を意識したためであろう。探索イベント実施に際し相互に情報交換があったどうかを知るのは難しいが<sup>30)</sup>、いずれも高額の賞金（賞品）<sup>31)</sup>の魅力も加わって反響を呼んだ。しかしいずれもツチノコが発見されることはなく、探索型イベントの実施の困難さや町村合併に伴うイベントの見直しなども関係して、多くが回を重ねることはなかった。

そのなかで、30 年間にわたりツチノコ探索イベントを続けるのは岐阜県東白川村である。この村は県都岐阜市の北東約 60 km に位置し<sup>32)</sup>、ツチノコ目撃譚が数多く残る村として知られている。桂川（2015）によれば、1989 年にツチノコの亡骸がご神体という槌の子神社が創建され、その例祭は年中行事化しているという<sup>33)</sup>。ツチノコによる地域活性化は観光拠点施設「つちのこ館」（東白川村では平仮名表記を用いる）の建設に始まり<sup>34)</sup>、「つちのこフェスタ」と呼ぶ探索イベントは 2018 年に第 30 回を迎えた<sup>35)</sup>。その特徴は地域の自然を楽しむ宝探しゲーム的イベントで<sup>36)</sup>、したがってツチノコにはこの地に棲息するはずの可愛い未確認動物であることが求められ、全村公園化構想における穏やかで美しい自然のシンボルとされたのである<sup>37)</sup>。

### 3. ツチノコ共和国の変化

#### a. 心象風景としてのツチノコ

上にあげたようなツチノコのイメージの変化を踏まえ、ツチノコ共和国におけるツチノコ伝承の役割とミニ独立国を称し続ける理由を考えてみたい。

言うまでもなく地域振興では、自らの地域の特徴を主張して他の地域との差別化を図る必要があるが、この時に過疎化の進む山間地では自然の素晴らしさを強調する場合が多い。しかし、ごく普通の山間地の自然に大きな違いがあるわけではないから、そこが幻の怪獣ツチノコの棲息を予感させる自然として発信できれば差別化されたところと主張することができる。そのため、ツチノコのイメージが未確認動物へと変化した状況のもとで、それが目撃されたと伝える自然に地域振興の具体策を託して探索イベントがいくつかの町村で実施された。

ツチノコ共和国においても同様であったが、その限界から地域の暮らしを体感するイベントへと変化したことは既に述べた。しかし、これらのイベントもその舞台が災害で大きな打撃を受けて継続が困難になったことは、自然は美しいだけでなく怖さもあることを思い起こさせた。しかもそれに抱かれて人びとの営みが行われているのであるから、人と自然は切り離せないという日本人の伝統的自然観<sup>38)</sup>に気づかせることにもなったのである。

地域の自然をこのようにとらえてみると、ツチノコ目撃譚は「ツチノコを見た」というより「見たように思った」ことの記録、言い換えればツチノコが居る心象風景の記録と考えたほうが理解しやすいことになる。そのため、地域振興に際しても、人とツチノコがともにあるとを感じる広が



りが重要になり、棲息地と推定される場所に焦点を当てるだけでは十分ではなくなる。そこで北山村では、生活文化を含めてツチノコ存在を思わせる広がり、すなわち自然と暮らしが一体化した広がり魅力を発信する方向が探られるようになった。このことは、ツチノコが人の暮らしを含む地域という広がりシンボルと考えるようになったことを意味しており、したがってツチノコは未確認の動物なのではなく、地域に居ついているではあろうが「目にはみえない何か」あるいは「居るように感じられるもの」という一種の妖怪へと回帰したと言えよう<sup>39)</sup>。

#### b. ツチノコ共和国の役割

では、妖怪へと回帰するとともに地域全体のシンボルとされたツチノコは、ツチノコ共和国というミニ独立国の継続においてどのような役割を担うことになったのか。

言うまでもなく国家は、領土という広がりのもと、自然と文化を共有する国民が暮らし、外には独自性を、内には一体性を主張する地域単位である。したがって、擬似国家としてのミニ独立国もまた、一定の広がりの中に自然と歴史があり、住民が営みを行なって共に暮らすところと主張することになる。とすれば、かつてのブームのころに華やかな活動をしたミニ独立国の多くが話題性を失うとともに消えていったのは、前掲の白石（2010）ほかで指摘した通り、目の前の経済的成果にのみ目を向け、自らの地域を総体的にみつめるまなざしが十分ではなかったためといえなくもない。地域振興に経済的豊かさという量的拡大を図る施策が必要なことは言うまでもないが、その前になされるべきは、自らの住まう地域が他の地域と区別されるままとりのあるところ、すなわち「ミニチュアの独立国」との意識を住民が共有することであろう。

もちろん、過疎化と産業の衰退で暮らし自体の存続が可能かという問題に直面している山間地において、また社会そのものが移動型に変化しつつある現代、伝統的な定住型社会を前提にして「地域は擬似的ながら国家」と称することへの疑義もなくはない。ことに、地域の存続には経済的発展が重要との立場からは、それがどのような成果をもたらせるかが読みにくいとの懸念もある。しかし、地域のこれからを考えるには、地域の魅力を発信する前提条件として、課題はあるもののここに暮らすことの喜びと自信を住民が抱くことが必要である。そのためには、時代の流れのなかで忘れがちな意識、すなわちこの地は自然的にも歴史や文化の面からもままとりある地域という誇りの再構築が求められ、それが「ミニ独立国」という表現に課せられたのである。このことは、ミニ独立国とは過疎山村のこれからに向けて地域とは何かを住民が考えるための社会教育の活動でもあるといえなくもない。

#### c. 地域らしさの確認に向けて

国家のパロディで地域活性化を図ろうとしたミニ独立国の多くが活動の表舞台に姿をみせなくなったなか、ツチノコ共和国ではなぜ独立国と称したのかを問い続け、自分たちが暮らす地域と

は何かを追い求めた。その結果として出てきたのは、ミニ独立国という考え方による経済的効果から文化的・社会的効果への転換であった。

過疎化の進む地域の暮らしに経済基盤の充実が必要なことはいうまでもないが、そのみで住んで良かった、あるいは関係を持てて良かったと思える地域となるわけではない。重要なのは、そこで暮らす人びとや関わる人びとが「自分たちの地域がここに存在する」という喜びを実感できる地域であり続けることなのである。そのためには「この地がどんなところか」を知るとともにその魅力を共有することが求められ、ツチノコ共和国では、民俗伝承に由来するツチノコを地域らしさ（アイデンティティ）のシンボルに、「吾、ここにあり」と暮らしの舞台の存在を意識するためミニ独立国を名乗り続けた。かくしてツチノコ共和国は、住民の意識改革に向けた社会運動という側面を鮮明にしたのである。

これを地域振興という視点からいえば、それを量的拡大ではなく、質的充実に目標を置く姿勢へと転換させたともいえる。そこでは、活動の結果が短期的かつ数字として見える形で表れるわけではないが、人びとが自らの生活の場への誇りと自信を取り戻すという成果をもたらせることであろう。このようなツチノコ共和国の社会運動への変容は、地域を擬似的な国家と見立てて始まったミニ独立国のいまの形の一つを示していると考ええる。

ミニ独立国とは国家のパロディという面白さにねらいがある活動ではなく、「国家」と称することこそ意義のある活動であるということを、ツチノコ共和国の30年が教えてくれる。

### Ⅲ. 河童共和国の活動

#### 1. ミニ独立国発足の背景

##### a. 建国のねらい

ミニ独立国を社会運動という視点でとらえるとすれば、熊本県八代市の河童共和国の活動も1つの示唆を与えてくれる。それを考えるには初めに建国のねらいをあげる必要があるが、その概要はすでに白石（1992）において報告しているので、これを補筆しつつまとめておく。

1988年に発足した河童共和国は、ネーミングや国家を模倣した組織などミニ独立国のスタイルをとりつつも、必ずしも経済的な活性化に焦点を当てたいわゆるパロディ王国ではなかった。建国宣言では自らを「パロディ国家」と称したけれども<sup>40)</sup>、その目的は河童という民俗伝承への文化的な問いかけを通して水資源のあり様を考えるという活動であった。これを具体的にいえば、高度経済成長期以降の工業化により八代市を流れる球磨川水系の自然破壊が進んだことへの危機感のもとで、かつての自然と共生した暮らしの回復を願った活動ということになる。そのシンボルとなった河童は、後述する当地の民間伝承に基づいて「水と水環境の化身・生命の根源・水文化の普遍的アイドル」<sup>41)</sup>と位置付けられたのである。

したがって河童共和国は、建国宣言にも「地域の停滞が好転の兆しがない状況を大方のひとは

経済的側面からのみ測っている」<sup>42)</sup>とあるように、地域振興とは経済的な活性化であるとの考え方をとらなかった。すなわち、河童という民俗伝承上の妖怪によって観光客を誘致するなどのためにミニ独立国と称したのではなかったのである。

これをミニ独立国の分類からいえば市民グループによる自然保護団体型といえようが、水問題とからめながら地域文化に抱かれる人びとの暮らしとその舞台を総合的にとらえるために、自らの地域をミニ独立国と称したことになる。河童共和国には、その建国の当初から社会運動という立場が見え隠れしているのである。

**資料 3 河童共和国建国宣言（抜粋）**（『河童共和国 30 年史』2017 年による）

ここに我われは、八代においてミニ独立国・河童共和国の建国を厳粛に宣言する。

〔1〕（前略）八代地方には流路計 115 km、支流 80 の一級河川、球磨川をはじめ、（河川名略）が西域に流れ、河口はいずれもおだやかな内海（不知火海）に開く。この天恵によって、この地には三千五百年前から人の暮らしがあり、（中略）環東・南シナ海の好位置にあり、海外との接触、いわゆる民族往来・文物渡来が早くから活発・頻繁であった。（後略）

〔2〕近年、この地で自然環境の汚染と破壊が急速に進行した。（中略）かつて、自噴水で生活用水と農業用水をまかなった同じ地においてこの悪化である<sup>43)</sup>。（中略）我われには、清流と澄んだ空、そしてかつての甘露な自噴水を取り戻す責務がある。

〔3〕球磨川の堰堤が鋭角にコンクリート化され、流域で無謀な砂利採取がつづいた。（中略）ひとが川を生活の場にしなくなったとき、ひとは川に対する親愛の情や畏敬の念を失い、やがて、川に生きる魚虫苔類のすべてを、川にまつわる民話を、最後には川そのものの存在さえ忘れ去る。（後略）

〔4〕八代市の低迷が叫ばれてから久しいが、大方のひとは、この状況を経済的側面からのみ測っている。しかし懸念すべきことは、この地の文化と政治の貧困にある。（中略）そこで我われはいま、河童九千坊と球磨川を擁し河童共和国を建国、八代固有の文化遺産を継承・創造・高揚せんとする。（後略）

〔5〕河童共和国はパロディ国家である。パロディの世界には上品な遊び心や本音の会話、夢のふくらみがある。我われは新しい生命力のほとばしりによって八代の良さを見直し、この地の文化を再構築せねばならない。（後略）

**b. 国名の背景**

河童共和国においては、何ゆえに「河童」を国名にしたのか。河童の呼称はカップのほかにガタロウ、カワランベ、ガラッパなど地方によって多様であるが、河川や湖沼に棲息する妖怪の一種としてその形状とともに広く知られており、伝承もまた日本各地に数多く残されている。河童共和国の舞台である八代地方もその 1 つで、ここには九千坊と呼ばれる河童の一族が暮らしていた

とされる。本稿は民俗研究の考察ではないのでその考証を避けて、河童をミニ独立国活動の国名にした経緯を挙げておきたい。

河童共和国のリーダーの1人で郷土史家の田辺達也氏によれば、八代地方には中国江南地方の海洋民が4世紀ごろこの地にたどり着き、その後北九州方面をはじめ各地へと勢力を広げたのが九千坊河童であったとの伝承があるという<sup>44)</sup>。そのため八代地方は九州における河童伝承の発祥の地とされ、海洋民の渡来伝承は古代にはこの地が国際交流の窓口だったのではとのロマンとも相まって長く地域住民の誇りでもあった。ミニ独立国建国に先立つ1958年に、住民が地域文化への思いを込めて球磨川河口付近に「河童渡来の碑」を建立したことにもそれが表れている。もとより河童に例えられる海洋民の渡来は、歴史的事実として実証されるものではない。しかし、はるか昔に海を越えてやって来た外国人たちが河童の始まりという伝承は、河童が水界の妖怪ではなく実は異邦人であったというのであるから、地域振興で重要な地域らしさの旗印として意味を持つものであった。

これに関連して、上記の碑に「オレオレデライタ」と刻されていることは河童共和国の建国で大きな役割を果たした。この仮名文字に八代ならではの歴史が秘められるとし、その解明に遊び心を抱いて地域文化に焦点を当てたミニ独立国活動をさらに推進することになったからである<sup>45)</sup>。河童共和国ではこの8文字を「呉の人が大勢でやって来た」の意とし、古代の先進文化と人の波が九州西南に位置する八代の地にいち早く押し寄せたこと、すなわち八代こそは河童源流の地と主張したのである<sup>46)</sup>。

## 2. ミニ独立国としての活動

### a. 河童文化を巡る地域間交流

河童共和国の活動は多岐に及んだが、それをミニ独立国という遊び心で展開するという話題性からマスコミ報道の機会が増えて発信力を生み出した。そのうち、河童伝承のある地域との連携の一部をあげてみる。

河童文化に関しては、建国と同じ1988年に<sup>47)</sup>、各地の河川流域の活動家のほか河童研究者・水環境研究者・河童愛好家などを集めた意見交換会（河童サミットと呼ばれる）が初めて八代で開催され<sup>48)</sup>、この交換会が30年後の現在まで全国各地を順に開催地としつつ継続される第1回の集まりとなった。これとは別に九州・山口地方の意見交換会（九州河童サミットという）が1993～2010年に開かれたが、河童共和国はその中心団体の1つであった。河童共和国の建国と活動に刺激されて、自らもミニ独立国を名乗った河川流域等も少なからずあったようである<sup>49)</sup>。

また、河童に関わる地域間交流組織として河童共和国と同年の1988年に結成された河童連邦共和国という全国組織があり<sup>50)</sup>、河童共和国はその立ち上げに関わったほか、その後も良好な関係を保って各地の河童愛好者・団体と交流を深めている。この組織は河童文化に関わる研究や関係

者の親睦などの活動を展開しているが、ここには台湾（台北）の団体も加わっているため交流の輪は海外にも及んでいる<sup>51)</sup>。

#### b. 水環境に関わる活動

河童共和国の大きな目的であった水環境に関しては、建国前から自然保護団体として地域の公害への警鐘を出版物等で発表していたが<sup>52)</sup>、建国後はそれが全国規模の活動における発信や組織化された市民運動へと展開されていった。水郷水都全国大会に1988年以降毎年継続して参加していること、2003年の第3回世界水フォーラム in 京都に出席して日本の水文化を論じたことなどにその一端がうかがえる。

地域活動においても、水問題に関する活動には積極的であった。そのすべてを列挙することは出来ないが、水環境保全に関わる行事等への参加、行政機関との各種の折衝・陳情などが次々に行われた。社会教育的な活動としては、「河童九千坊」と名付けた広報紙の定期刊行<sup>53)</sup>をはじめとした各種の出版活動、くまがわ自然大学（通称かつぱ大学）と称する公開講座の継続的な開催が目される。これらの出版や講座に加えて各種研究集会での講演などは、水問題と地域文化を融合させて地域課題を遊び心のなかで考えようという意味からも、ミニ独立国の社会運動的側面の表れであった。

#### c. 地域振興との関わり

ミニ独立国としての活動は、八代市を含む熊本県内のさまざまな地域振興事業への参加にも及んでいる。その概要は河童共和国のリーダーの1人田辺達也氏が2013年にまとめた「河童共和国の活動」<sup>54)</sup>が分かりやすいので、資料4として挙げておく。

#### 資料4 田辺達也「河童共和国の活動」（抜粋）

（前略）河童共和国は地元のまちづくり運動へも積極的に参加してきました。八代における「まちづくり団体」結成の呼びかけは19年前（1994年）に遡り、県と市の肝いりで始まった同時進行の「地域づくり熊本県協議会」と「八代地域づくり研修交流会」です。（中略）河童共和国担当の第6回（2000年度）では、河童のロマンについて討論しています。地域交流センター（国土交通省の外郭団体）提唱、1993年スタートの「球磨川地域研究交流会」へは、八代の民間団体代表として参加、人吉・球磨との共同事業に5年間、源流調査2回、球磨川レジャーマップなどに実を結びました。1990年、八代市主催の第3回河童ドン会議（行政主催の河童サミット）に協力したご縁で、市政モニターを2年間、市内の中学校文化祭ではあちらこちらからお呼びがかり協力しました。1995年、八代広域行政事務組合が事務局になって始まった「2デーマーチ」は、第1回から実行委員に指名され微力を尽くしました。さらに90年代、官民共同の水の祭典「八代環境フェスティバル」は毎年場所を変えて開催、河童ブースが目されました。（以下略）

この報告が出された後も、2016年の「火の国未来ネットワーク八代ブロック会議」で活動の現状が報告されるなど<sup>55)</sup>、河童共和国の地域振興への貢献はいまも続いている。

このような地域振興諸事業への関わりは、ミニ独立国という形でなくとも可能であったかもしれない。しかし、振興策の対象とする地域の範囲を行政域とか河川流域などと呼ぶのではなく、独立国とパロディ化して表現することで暮らしに関わる地域的单元への興味と関心を人びとに抱かせることになった。しかも、水界の妖怪河童を地域の伝承と結びつけてキーワードにするという方法は、活動にユーモアをもたせるとどまらず、地域振興の背後にある自然と文化の重要性を考えることに大きく寄与した。それ故に河童共和国は、八代地域の地域振興団体として高く評価されたのである<sup>56)</sup>。

### 3. 活動の継続性

既に述べたように、かつて地域の知名度上昇や経済的効果の面から注目されたミニ独立国の多くが消滅したが、そのなかにあつて河童共和国は、建国30年を経てもなおその活動を継続して現在に至っている。これもすべては、八代の地域個性として水環境に焦点を当て、そのシンボルに河童を据えて地に足のついた文化の掘り起こしと発信を行うとともに、幅広い地域間交流をしてきた結果であると思われる。すなわち、河童共和国の名を冠した活動が一時的・直接的成果を求めるものではなく、地域のこれからを見据えた長期的展望のもとでの活動であつたこと、それこそが長くミニ独立国であり続けた理由であろう。

地域とは、これを生活空間と言い換えれば、そこで暮らすまたは関わりをもつ人間集団を主体として、自然や社会の様々な構成要素にバランスを保たせながら歴史的に作り上げられた広がりである。そのため、このバランスに乱れが生じたとき<sup>57)</sup>、これを是正しつつ新たな方向を探る行動が必要となる。この行動が地域振興であるが、その推進には暮らしの基盤に自然的・文化的裏付けが求められ、河童共和国ではそれを地域に残る河童伝承に託したのである。しかもこの河童伝承は、水の妖怪がいたとのロマンと南方からの海洋族の渡来伝承とが相まって地域文化への興味を喚起し、地域振興の原点として重要な地域らしさを見える形で人びとに示してくれた。この意味で河童共和国は、地域のあり様を人びととともに考えるという社会運動の性格をもつ活動であつた。

もっとも河童共和国は市民団体型の組織であり、地域のあり様に対する考え方を地域住民全体へいかに浸透させるかという課題を常に抱えている<sup>58)</sup>。さらに、ミニチュアながら国家というための地域的枠組みに関しても、八代地域とか球磨川流域という一般的な表現はあつたものの、それを如何にとらえるかを厳密に示したわけではない。加えて現在は、建国とその後の活動をけん引してきたリーダーたちの高齢化による後継者難という、いずれの団体にでも見られる悩みもある。しかし、地域の諸問題に対して個別に対応するのではなく総合的視点からとらえて活動する

という方式により、また「パロディの世界には上品な遊び心がある」(建国宣言による)との姿勢を変えることなく活動を行ってきたことによって、河童共和国がミニ独立国として長く継続されてきたのである。

#### IV. 地域振興のなかのミニ独立国

##### 1. 地域へのまなざし

###### a. 2つのミニ独立国の30年

ツチノコ共和国と河童共和国の30年から、地域振興の手法としてのミニ独立国のあり様の1つがみえてくる。かつてのミニ独立国というのは、経済効率が優先されモノの豊かさや都市的な暮らしが望まれた時代、取り残されていくマチやムラが内発的に地域振興を図るために展開された活動であった。そのねらいは経済活性化をはじめ多様ではあったが、国家をパロディ化した事業の面白さに頼るという話題性には限界があり、2000年代を迎えると活動を続けるミニ独立国が少なくなっていくことは既に述べた通りである。

しかし、人の顔かたちがそれぞれ違うように、地域はどれ一つをとってみても同じではない。だからこそ、「らしさ」ともいうべき地域個性を誇りに思い、その自立性と自律性を遊び心で「国家」と称することこそがミニ独立国ではなかろうか。とすれば、これを地域振興につなげるには地域のあり様と関わる考え方、大仰な表現ではあるが大局観が求められ、それを「国名」というキーワードで表現しつつ地域個性を具体化させて発信する活動が重要となる。したがってミニ独立国は、地域としてのココロの豊かさの構築に究極の目的があり、モノの豊かさはその結果として得られるという地域振興策ととらえるのが至当ではないかと考える。

この視点からみるとツチノコ共和国の現在は、未確認動物へとイメージを変えたツチノコの探索という話題性から脱皮して、ツチノコの棲息を予感させる自然とともにある暮らしの場を見つめ直そうとしていることに特徴がある。その背景となったのは、この地が山間地で人口減少と高齢化が著しく人びとの暮らしに閉そく感を広げるなかで、わが地域がここにあるという意識、すなわち自己存在を主張する共通意識を見失いがちになっていることへの問いかけであった。地域振興では他の地域との差別化が求められるが、その前提として俗に郷土愛とも言いえる意識、すなわち、自らの地域が自然的にも歴史的にもまとまりをもつ素晴らしいところという意識を人びとが共有する必要がある。なぜなら、それを無くしての活動は人びとに自らの暮らしとの関わりを実感させることがなく、極論をすれば、ミニ独立国は文字通りのお遊びととられかねないからである。ここにおいてツチノコ共和国は、妖怪であるツチノコが存在するであろうという心象風景に地域らしさを見出し、下北山村という地域のアイデンティティを再構築する活動に焦点が当てられることとなった。

一方河童共和国は、球磨川の水環境の悪化という公害への懸念のもとで発足したミニ独立国で

ある。建国の当初から河童をキーワードに地域文化と水環境を結びつける活動を展開し、地域のあり様に関わる情報発信と啓蒙的行動、地域間交流などを継続してきた。ことに地域間交流は<sup>59)</sup>、地域の抱える課題をこの地に限定した問題点とせず、広域的にとらえようとした点で意義は大きい。このような河童共和国の活動は、ミニ独立国が社会運動、あるいは地域社会づくりの活動であることを表しているといえよう。しかし、それが地域のあり様に対する1つの見方の主張という市民運動的な性格をもちかねない側面もあって、地域振興に求められる住民意識の結集という点では若干の問題もある。とはいえ、ミニ独立国とは地域らしさを自己主張するために国家と称するのであるから、八代地方が自然的・歴史的まとまりあるところととらえてそのアイデンティティを探り続けるという意味では意義が大きく、その結果、河童共和国が長く継続されてきた。

#### b. 民俗伝承の役割

これら2つのミニ独立国に共通するのは、一方はツチノコ見聞録、他方も河童渡来伝説という民俗伝承を活動の根拠に置いていることである。国名にしても、かつて地域振興策として注目されたころのミニ独立国にはネーミングの面白さに期待したものが多かったのに対し<sup>60)</sup>、地域らしさをみつめるまなざしを伝承に託して、それが残される場所のイメージを象徴的に表現したものであった。

民俗事象に注目した地域振興では、河童伝説や座敷わらしなどに焦点を当てた遠野市やさまざまな妖怪に結び付けた境港市などがよく知られる。これらは、民俗伝承の裏付けがあるか創出された魅力かといった相違はあるが、現実にはそれらは存在しないと知りつつも、それが居るのではないかと思わせてくれる場所の雰囲気が醸し出す魅力を利用して地域活性化を図ろうとするものであった。

これに対しツチノコ共和国は、ツチノコを人びとの暮らしの場を含む地域全体のシンボルととらえたところに特色がある。すなわちツチノコは、地域に居ついているが目にはみえない「何か」といった妖怪であるが、人の営みとないまぜになりながら形成されてきた地域の自然の形を分かりやすく表現してくれる言葉と考えられたのである。したがってその目撃譚は、人びとが地域のあり様を考える際の原点の1つとなったのであり、その意味からも民俗事象が地域振興に与える影響の大きさを知ることができる。

河童共和国の場合は、河童が水環境の象徴であるだけでなく、河童渡来伝承が地域の歴史・文化にロマンを加えて関心をもたせたことから、ミニ独立国の活動に民俗事象が果たした役割は大きい。ここでは、河童伝承が接点となって地域間交流などの活動が展開されただけでなく、それが八代地方という領域の空間的まとまりを表現する言葉ともとらえられたのである。地域振興にとって重要な地域らしさの主張と地域へのまなざしの深化は、すべて河童に関わる伝承があってこそであったと言っても過言ではない。



このように、長く活動が続ける2つのミニ独立国においては、いずれも民俗事象をキーワードに活動していることは注目されてよい。民俗事象は、地域と呼ばれる広がりの中、ごく普通の人びとが営みを続けてきたなかから得たり感じたことがらの記録とすることができる。したがって、時代の流れとともに地域が変化していくとき、地域の抱える問題点やそのあり様を考えるに当たって、来し方を振り返るための材料としての民俗事象の果たす役割は大きいと思われる。もとよりそれは過去への回帰を願うためではないが、人びとの長年の暮らしに学んでこそ地域のこれからがみえるからである。

## 2. ミニ独立国のこれから ― まとめを兼ねて ―

国家というのは、既に述べたように、領土という広がりのもとで自然と文化を共有する国民が暮らし、外には独自性を内には一体性を主張する地域単位である。したがってその模倣としてのミニ独立国とは、住民たちが共に暮らす地域が国家にも例えられるようなところであること、すなわち、住民に自然と歴史の共有があり、他の地域と差別化される地域らしさのある場所との主張にほかならない。

ところが現在は、生活行動の広域化に加えて生活環境の均一化が進み、地域らしさの前提となる地域差が見えにくくなっている。また、都市的生活との平準化こそが発展とみる風潮もあり、さらに個別の事情として人口の減少と高齢化、経済活動の停滞なども関わってくる。そのため、地域らしさを言うために必要な人びとの地域への思い、俗に地域愛とか郷土愛とも言われるような思いが薄れるとか、時にはそれを無くしつつある。したがって、地域の課題を克服して地域振興を図るには、まずは地域への熱い思い、卑近な表現を用いれば「この地は素晴らしいところで好きだ」といった思いを取り戻す活動が重要となる。もっとも、広域化や都市化などの影響を受けている地域の場合は、その変化に即した新たな地域愛を創出する活動が必要となってくることは言うまでもない。

ここにおいて、地域愛とか郷土愛を感じ取れる地域、すなわちまとまりある生活空間が重要な意味をもつことになり、この広がりを総合的な地域単位である国家になぞらえたのがミニ独立国であった。本報告で取り上げたツチノコ共和国は、ツチノコの棲息を予感させる自然のもとでの人々の暮らしの場にも視点を広げ、ツチノコとともにある地域を我が生活空間ととらえて疑似的な国家を自称し続けた。また河童共和国は、河童で象徴される優れた水資源と歴史文化を誇りとし、それらに抱かれて暮らす人びとの生活空間の範囲をミニ独立国と称したのである。

このように見てみると、観光客誘致型のミニ独立国のような経済的活性化というシングルイシュー的な国々が消滅するか国名を残すのみになるなど、活発な活動から注目されたかつてのミニ独立国の大半が消えていった理由も理解できる。なぜなら、国家を自称する意味への接近を横に置いたまま、話題性と即効性のある結果を求めようとしたからである。

これに対して事例にした2つのミニ独立国は、いずれも人びとの地域への思いにほころびが認められるなかでそれを如何に修復するかにねらいを定め、地域を総合的に見つめるまなざしのもと、国家になぞらえた生活空間への思いを鮮明にしつつ活動を続けている。そこでは、地域社会づくりとも言えるべき一種の社会運動を展開するに際しての空間的単位（地理的単位と言ってもよい）に対し、愛情とユーモアを込めてミニ独立国と名付けたのである。

わずかに2つの事例から結論を得る愚は避けなければならないが、ミニ独立国が自らの地域を国家と称すること自体はパロディであるとしても、そのねらいは地域のあり様を考えるとところに置かれていたのである。地域振興の視点からいえば、ミニ独立国のこれからは、活動の面白さや話題性にねらいがあるのではなく、「ここはミニチュアながら国家にも例えられるところである」と主張することにこそ意義があると言えるのではないか。

## あとがき

1990年ごろから2000年にかけて筆者がミニ独立国に注目したのは、この活動が一般に地域と呼ばれる空間的広がり of 現代的意味を考えさせてくれるのではないかとの問題意識によるものであった。しかし現実には、国家のパロディという面白さに頼って即効性ある経済効果を期待する活動になりがちであったことから、ミニ独立国という活動そのものが次第に見られなくなっていった。地域という広がりに関しても、少子高齢化に象徴される社会の変容のほか、産業構造の更なる変化、生活行動の広域化、情報化社会の進展などに加えて行政域の拡大も関係し、現代的な地域とは何かという定義そのものがとらえられにくくなった。これらに伴い、筆者のミニ独立国への積極的な取り組みは、2010年代半ばまで遠ざかることになったのである。

地域のあり様に関わってミニ独立国の重要性を再び考えるようになったのは、「はじめに」であげた2017・18年のツチノコ共和国と河童共和国との再びの接触からである。この間も2つのミニ独立国との交流は継続してはいたが、改めて30年に及ぶ活動に関する資料収集を進めるとともに、その他のミニ独立国についても現在の状況の把握を行うことにした。

その結果得られたのは、ミニ独立国が長く活動を継続するのは、国家を称することによる地域らしさの主張、いわば地域社会づくりという社会運動としての活動に存続の意義を求めているということであった。このことは、上に挙げた問題意識、すなわちミニ独立国は地域の現代的意味を考えさせてくれるのではないかということについて、解答とは言えないまでもそれに類するものを教えてくれる参考になるものと思われたのである。

本稿では、上記の経緯を経て、現代の地域のあり様と地域振興との関わり の観点から再びミニ独立国の意味を考えるねらいのもとで、2つのミニ独立国の変容と現状を報告した。

## (謝辞)

本稿をまとめるに当たっては、ツチノコ共和国ならびに河童共和国の活動に関わっておられる方々はもとより、いくつものミニ独立国の関係者から様々なご指導とご協力を頂戴した。ことにツチノコ共和国を主宰される野崎和生氏、河童共和国の中心的なリーダーである田辺達也氏からは、多くのご助言を頂くとともに資料類の提供を受けた。お世話になった全ての方々のお名前を記すことは出来ないが、心より御礼を申し上げます。

## 注

- <sup>1)</sup> (財)地域活性化センター編集部：「特集ミニ独立国事情」、『地域づくり』第17号(1988年)、ここには「逆説的にいえば、閉国されたときにはじめて建国の意義が生かされる。これはミニ独立国が地域として自立することでもある」との筆者のコメントが載せられている。「地域としての自立」とは社会的・経済的に活力のある地域として存在するとの意味であるが、現実には自立できるほどの活性化を達成する前に閉国されたミニ独立国が多かった。
- <sup>2)</sup> 「活性化の表舞台から姿をみせる機会が少なくなった」とは、ミニ独立国が新聞報道等のパブリシティ効果を期待した活動であったので、その露出度が減少したという意味である。
- <sup>3)</sup> 河童共和国発行：『河童のクロニクル 河童共和国30年史』(2017年)
- <sup>4)</sup> 「自然の国」は自給自足による自然と人間の調和を理想として暮らす人びとの集団で、地域振興型のミニ独立国ではなかった。(三省堂編『につぼん「独立国」事典』、三省堂、1985年、pp.196～201)
- <sup>5)</sup> それぞれのミニ独立国のユニークな活動だけでなく、ミニ独立国サミットと称する全国交流会のほかミニ独立国オリンピックや万国博など、全国規模のイベントの開催も広く報道されてミニ独立国という活性化策の話題を広めた。1987年には、いくつかのミニ独立国の代表が世界最小の国家パチカン市国を訪問し、法皇ヨハネ・パウロ二世に謁見するなどの国際交流活動も行っている。
- <sup>6)</sup> 西日本新聞社の調査による「ミニ独立国一覧」(1989年2月)には、全国で203カ国のミニ独立国が記載されている。
- <sup>7)</sup> 現職の首長がミニ独立国の国王や大統領に名を連ねる場合は、ミニ独立国を市町村の地域活性化部門ととらえることも少なくなかった。
- <sup>8)</sup> 秋田県では県内67の全市町村に特産品開発などをねらいにミニ独立国を誕生させた。広域行政に関しては、複数の市町村がそれぞれの領域を国家に見立てて連邦制を名乗る場合が多く、隣接5町で広域観光の振興を図った兵庫県のしそウ森林王国などがそれである。
- <sup>9)</sup> 1997年の通称ミニ独立国サミット(全国交流集会)の開催案内状は、当時確認されていたミニ独立国101カ国に案内状を発送したが回答数は36であったという。主催団体のミニ独立国「チロリン村」(京都府宮津市)関係者談。
- <sup>10)</sup> 地域の集客イベント開催時に主催団体としてミニ独立国を称するとか、企業活動のなかで国名を冠するなどミニ独立国が残るとみえる場合もあるが、これをミニ独立国活動が継続しているとみてよいかどうか判断は難しい。一例をあげておく。1986年に現職の通商産業大臣渡辺美智雄(当時)と通商友好条約を締結し(もちろんパロディである)、また国名がブータン王国に類似するとの懸念が出て一躍有名になったイノ

ブータン王国（和歌山県すさみ町）は、2019年現在、イノブータン城と呼ぶ当時の建物が残り、イノブタダービーというイベント時に建国祭を開催して国名を名乗るにとどまっている。

- <sup>11)</sup> 第1次ミニ独立国ブームの1982年に建国され、地域通貨の発行などユニークな活動による観光客誘致で一躍有名になった福島県岳温泉のニコニコ共和国が「日本国に合併」と遊び心を発揮して閉国宣言をしたのは2006年である。
- <sup>12)</sup> ふるさと創生資金事業とは自ら考え自ら行う地域づくり事業のことで、1988～89年にかけて地域振興のため全国の各市町村に1億円を交付、使途はそれぞれの判断にゆだねるとした。成果がみえやすいハード事業に用いた市町村が多く、遊び心によるソフト事業中心のミニ独立国はその陰に隠れた。
- <sup>13)</sup> 平成の大合併は2005年ごろがピークであった。行政が関わるミニ独立国の領域であった旧市町村域と関係部署がなくなるとともに、その活動も行われなくなった場合が多い。
- <sup>14)</sup> 「むらおこし」とは、経済発展から取り残された地域が活力を取り戻そうという諸活動、いわゆる地域活性化のことをいう。対象とする地域により「まちおこし」「地域おこし」など呼び名は多様であるが、いずれも地域間格差の是正にねらいをおく内発的な活動であった。
- <sup>15)</sup> 大峰奥駆道の修行場（摩という）の前鬼山がある。
- <sup>16)</sup> 2018年現在、下北山村と近隣町村を結ぶ公共交通機関は1日1往復のバスのみであるから、交通手段は自家用車に頼らざるを得ない。
- <sup>17)</sup> 下北山村スポーツ公園は池原ダム（1965年完成の発電用ダム）の堰堤下に造られ、サッカー場・テニスコート・ゴルフ場のある合宿型の施設で、近接して日帰り温泉「きなりの湯」がある。近年はダム湖のブラックバス釣りも重要な観光資源になっている。
- <sup>18)</sup> 木村博一編著『下北山村史』、発行：下北山村役場、1973年
- <sup>19)</sup> ここでいうローカル紙は吉野熊野新聞1987年10月9日・24日版で、目撃証言とともに「今度こそ生け捕りに」の記事が掲載された。ツチノコが関心と呼んだのは、1989年が巳年に当たることも関している。
- <sup>20)</sup> 新聞報道では四大全国紙が取り上げたほか、週刊誌で報道された影響も大きかった。このころ、リーダーの野崎和生氏が当時視聴率の高かったテレビ番組11PMにも出演している。このイベントは民間の主催ではあるが、話題性の高まりのなかで行政としても、観光担当課を問い合わせ窓口にする、ツチノコ捕獲時の賞金の支出を検討するなど協力を行っている。
- <sup>21)</sup> 主催側としては、ツチノコを探すイベントだけでなく、地域住民との交流パーティの開催、地場産品による食事や土産物などその前後の仕掛けに留意した。もてなしのため沢蟹200匹を捕獲したというエピソードもある。
- <sup>22)</sup> 活動の中心となる集まりを愚人会議、役職名を爽里大臣や大喰大臣等、年会費を税金と呼ぶなど遊び心で表現した。会費の納入者が国民であり、パスポートと呼ぶ案内冊子を配布、村外の居住者を出稼ぎ中と称した。イベントへの複数回参加者を領事と称して、まな板サイズの檜板製看板の配布も行っている。
- <sup>23)</sup> 連携を試みたのは岐阜県東白川村や広島県上下町などである。東白川村にはツチノコ目撃譚が多く残され、1989年から年1回のツチノコ捜しイベントが30年間続いている。上下町は府中市へ合併したことに伴いツチノコイベントが中止になった。
- <sup>24)</sup> 蛭狩り（源氏蛭と平家蛭の棲息を源平合戦になぞらえた）、突進鍋（猪肉のすき焼きのパロディ風表現）、こうもりフェスタ、ネイチャーゲーム、森の音楽祭、トンボ観察会、炭焼き体験などを実施した。
- <sup>25)</sup> ことに2004年8月の台風11号による被害により蛭やコウモリの棲息地などイベントの対象地が壊滅した影響が大きい。

- <sup>26)</sup> 古代語ではツ=の、チ=霊なので、ノツチは野の霊となる。
- <sup>27)</sup> 釣り人で随筆家とは山本素石（1919～1988）で、ツチノコブームの火付け役として知られる。探索の顛末は『逃げろツチノコ』（二見書房、1973 年）として出版、山本素石がモデルの新聞小説『すべてころんで』（著者田辺聖子、1972 年朝日新聞連載）も評判を呼んだ。
- <sup>28)</sup> 当時はアポロ計画による月面探査が宇宙人への興味とも重なって話題を呼び、地球上の未確認動物への関心が高まった時代であった。
- <sup>29)</sup> 自らツチノコを目撃したという矢口高雄の漫画『幻の怪蛇バチヘビ』が「週刊少年マガジン」に掲載されたのは 1973 年、藤子・F・不二雄『ドラえもん』の「ツチノコさがそう」の掲載は 1974 年の「小学五年生」、「ツチノコ見つけた」は 1975 年の「小学六年生」である。水木しげる『妖怪なんでも入門』（1974 年）でもツチノコが取り上げられている。
- <sup>30)</sup> それぞれが「最近ツチノコが目撃された」と自認するため相互の関連を知るのは困難であるが、奈良県下北山村のツチノコ探検のリーダー野崎和生氏やその仲間が 7 ヶ町村（東白川村、旧瑞穂町、旧美方町、旧千種町、すさみ町、旧吉井町、旧上下町）に招聘されたことから、下北山村の報道に誘発された可能性も否定できない。
- <sup>31)</sup> 発見者への賞金（賞品）は生け捕り 100 万円の場合が多いが、なかには 2 億円とか別荘地の提供というのも見られた。
- <sup>32)</sup> 東白川村は合掌造りで知られる白川郷とは別の村落である。ツチノコによる地域活性化を始めたころの人口は約 3,300 人（1990 年）、現在では約 2,100 人（2018 年）となっている。
- <sup>33)</sup> ツチノコの亡骸発見の情報が寄せられたのは 1959 年。埋葬地とされる場所の変色した土をご神体と見立てた槌の子神社の創建は 1989 年である。この神社はかつての稲荷社の場所に位置し、創建後 30 年を経た現在も毎年の祭礼を続けて年中行事になるなど、ツチノコ伝承が新たな現代民俗を創出したともいえる。
- <sup>34)</sup> ふるさと創生事業で交付された 1 億円の一部を利用して物産販売施設「つちのこ館」を建設、ツチノコ関連資料を展示する「つちのこ資料館」を付設した。
- <sup>35)</sup> つちのこフェスタには毎回 2,000 人ほどの参加者があるという。2018 年は悪天候により中止。
- <sup>36)</sup> 地場産品である茶畑など豊かで明るい自然のなかを巡る散策イベントであり、妖怪がいると想像させる自然にふれるものではない。
- <sup>37)</sup> 東白川村は NPO 法人日本で最も美しい村連合に参加している。この団体は、美しい景観に配慮したまちづくりを行うとの趣旨のもと 2005 年に設立され、2017 年現在、全国 63 町村・地域が加盟。
- <sup>38)</sup> 日本人の自然観では、自然は人間を取り巻く周囲の環境という意味ではなく、人間を含めたすべてを構成要素としている。それは現代的な意味での自然の概念ではとらえられず、ありとあらゆるものという意の森羅万象とか、天地、万物などの語で表現される。
- <sup>39)</sup> 妖怪を地域活性化につなげた例としては岩手県遠野市や鳥取市境港市が知られるが、いずれも現実には妖怪は存在しないと知りつつも、その存在を思わせる場所が醸し出す魅力によって活性化を図ろうとしている。下北山村がツチノコによって目指すのもこれに類似する。
- <sup>40)</sup> 河童共和国の建国宣言に「パロディの世界には上品な遊び心や本音の会話、夢のふくらみがある」と記されることから、パロディと言いつつも多くのミニ独立国にみられる面白さがねらいの模倣とは一線を画している。
- <sup>41)</sup> 「河童共和国の存在意義と活動の成果」（河童共和国資料、1992 年）による。
- <sup>42)</sup> 文章の一部を改変。資料 3 を参照のこと。

- <sup>43)</sup> 「この悪化」とは、球磨川伏流水の枯渇と塩水の遡上拡大、灌漑用水の塩水化の進行などのほか、地下水は飲料に不適と報告されたことなどを指している。
- <sup>44)</sup> 伝承では大海を泳いで渡ってきたともいい、棲みついたのは八代郷徳の淵とされる。時代を経て、戦国時代には加藤清正との争いに敗れてのち九州北部の筑後川流域に移ったとの伝承もある。九千坊の名称は、河童の一族が九千匹であったとされることに因むようである。
- <sup>45)</sup> 碑の設置はミニ独立国発足の30年前に関わらず、当時の状況が残されていなかったことがわかる。
- <sup>46)</sup> 田辺達也「河童渡来の源流―球磨川と八代」(角川書店刊『怪』37号、2012年所収)による。田辺達也氏提供。
- <sup>47)</sup> 1988年8月に開催された。河童共和国の発足が同年2月であるから、短期間で準備したことになる。
- <sup>48)</sup> 遊び心のある運営がなされたが、民俗学や歴史学からの討議も行われ、報告書も作成された。愛好家の知的な好奇心の対象になりがちな河童の学術的意味を考える機会にもなったといえる。
- <sup>49)</sup> 田辺達也「河童共和国の活動」(火の国未来づくりネットワーク八代地域ブロック地域づくり団体交流会報告、2013年)による。田辺達也氏提供。
- <sup>50)</sup> <http://kappauv.com/sub3/sub30201.html> ほかによる。この組織は河童共和国の建国6ヵ月後の1988年9月に発足しており、その準備段階から河童共和国関係者が参画するとともにその後も指導的役割をはたしている。なお、河童連邦共和国の参加団体は「〇〇河童村」と称するものが多く、必ずしも自然保護型ミニ独立国とはいえないものも含まれる。
- <sup>51)</sup> この団体は台北河童村といい、河童共和国と相互訪問を行ったこともある。
- <sup>52)</sup> 田辺達也『レーヨン工業と二硫化炭素中毒』(不知火出版会、1983年)、田辺達也・串山功助『球磨川は誰のものか』(不知火出版会、1987年)など。
- <sup>53)</sup> 「河童九千坊」の発行は年1〜2回であるが、既に40号を越えている。
- <sup>54)</sup> 前掲49)
- <sup>55)</sup> そのほか、くまもと未来創造フォーラム in 八代(2013年)、熊本さわやか大学八代校(2016年)での報告などがある。
- <sup>56)</sup> 1999年熊本日日新聞社制定「ひのくに応援大賞」、2000・2009年「熊本信友社賞」受賞などがある。なお、熊本信友社は学術文化・体育などの振興を目的として1974年に設立された公益財団法人である。
- <sup>57)</sup> バランスの乱れとは、公害などによる人為的な自然環境の変化のほか、外部要因による社会・経済の変化をさしている。
- <sup>58)</sup> 建国当初は環境問題への対応を鮮明化させていたこともあって、経済的成長を期待する行政機関や住民との対立関係を生むこともみられたようである。市民団体としては、河童文化に限っても八代にはいくつかの団体があって、その代表とみなせるのかという意見も見られた。白石(1992年)による。
- <sup>59)</sup> 地域間交流をパロディ国家風に表現すれば外交活動といえるかもしれない。
- <sup>60)</sup> ミニ独立国の多くが経済的活性化の手段と考えられたこともあって、国名には自然や物産、行事、施設などをユニークな言葉で表すネーミングの面白さで宣伝効果を高めようとする傾向がみられた。

## 参考文献

- 白石太良「鹿児島県におけるミニ独立国の動向」、鹿児島女子短期大学紀要、第23号、1988年
- 白石太良「兵庫県における村おこし型ミニ独立国の動向」、流通科学大学論集—人文・自然編、第2巻1号、1989年
- 白石太良「ミニ独立国運動による地域づくりの現況—アンケート調査の整理を中心に—」、流通科学大学論集—人文・自然編、第3巻1号、1990年
- 白石太良「地域づくり型ミニ独立国運動の変容」、流通科学大学論集—人文・自然編、第4巻1号、1991年
- 白石太良「地域づくり型ミニ独立国運動の変容（Ⅱ）」、流通科学大学論集—人文・自然編、第5巻1号、1992年
- 白石太良「ミニ独立国運動の変化と方向性」、学校法人中内学園理事長中内功喜寿記念論集、1999年
- 白石太良「地域づくり型ミニ独立国のいま—4つの事例から—」、流通科学大学論集—人文・自然編、第22巻2号、2010年
- 白石太良「ツチノコ伝承を活かす山間地のむらおこし—奈良県下北山村の事例を中心に—」、近畿民俗（近畿民俗学会）、第185号、2019年
- 白石太良・野崎和生「ミニ独立国運動と観光振興—ツチノコ共和国を事例に—」、日本観光学会誌、第50号、2009年
- 大下茂・天野光一・熊耳冬樹「ミニ独立国による地域づくりに関する研究」、観光研究（日本観光研究学会）、第8巻2号、1997年
- 伊藤龍平『ツチノコの民俗学』、青弓社、2008年
- 桂川眞郷『回想つちのこ村』、私家本、2015年（著者は元東白川村村長）
- 河童共和国『河童のクロニクル 河童共和国30年史』、河童共和国発行、2017年